様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １０ 日現在

機関番号：１７１０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2021～2023
課題番号：２１Ｋ００３４４

研究課題名（和文）イギリス・ロマン主義文学における知識と社会改革の意義

研究課題名（英文）The Importance of Knowledge and Social Reform in British Romanticism

研究代表者
後藤　美映（Gotoh, Mie）

福岡教育大学・教育学部・教授

研究者番号：２０２４３８５０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、19世紀初期のイギリス・ロマン主義時代が、17世紀の科学革命から誕生する近代科学を中心に、生物学、生理学といった特定の学問分野に専門分化していく過渡期の時代であったことに着目し、イギリス・ロマン主義の詩が、18世紀の博物誌や文芸共和国という、総合的、横断的に集積された知識の様態を継承した、諸学問の包括的知識を有した一つの学問領域であったことを明らかにするものである。そしてそうした学際的な知識を包含した詩は、最終的に美学的、社会的改革を標榜しており、イギリス・ロマン主義の詩が知識をどのように言葉で表現し、社会改革を目指したかを考察するものである。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究では、詩と科学が明確に分断される以前のイギリス・ロマン主義時代において、詩と科学はもちろん、医学、政治経済学、美学、哲学といった学問間における横断と融合による知識こそが、人間性を探究するための知の体系であったことを明らかにし、19世紀のロマン派以後から現代社会における知識の変遷とその再検討の可能性を呈示するという社会的意義を有している。そして、そうした学際的知識によって大衆を啓蒙し社会改革を目指すという、ロマン主義文学の根幹にあった知の体系と社会改革の精神を照射するという学術的意義を有している。

研究成果の概要（英文）：This research project argues how the Romantic literature pursued a place in the analytical milieu in which newly formulated scientific disciplines of the seventeenth-century scientific revolution gradually earned intellectual legitimacy, by adapting the language derived from the cross-fertilization of branches of knowledge in eighteenth-century natural philosophy and the Republic of Letters. It also explores how Romanticism's fruitful engagement with the language, rooted in a holistic conception of knowledge, manifested possibilities for social reform.

研究分野：イギリス・ロマン主義文学

キーワード：イギリス・ロマン主義文学　近代医科学　知識　ジョン・キーツ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

2020 年 6 月に改正された科学技術基本法において、人間と社会のあり方が問われ、科学技術とイノベーション創出を図る上で、人文科学を含むあらゆる分野の科学技術に関する知見を活用することが重要であると規定された。科学偏重の現代において、こうした学際的な知識と、それが呈示する複層的な人間性についてのヴィジョンを通して、社会改革の可能性を問うことは、現在社会においても重要な意義を持つ。翻って、本研究にみるイギリス・ロマン主義文学についての従来の研究においても、これまで学際的な視座に立って、その文学的知識のあり方に言及することは少なく、人文学的領域に留まる研究の視座を維持してきたといえる。したがって、19 世紀初期におけるイギリス・ロマン主義文学が、医科学、政治経済学、哲学、美学といった諸学問領域といかに学際的に融合し、包括的な知識の体系に与する学問領域の一つであったかを研究することは、現代における人文学的知と科学的知の分裂を超えた知識のあり方を摸索する一助となる。人文学的知と科学的知の分断の萌芽期といえるヨーロッパの 19 世紀は、16、17 世紀の科学革命から誕生する近代科学が、生物学、生理学といった特定の学問分野として専門分化していく時代であった。しかし、現代「科学」という意味を有する science という語は、14 世紀に英語となり、19 世紀初期まではラテン語の *scientia* に由来する知識全般を意味した。したがって、19 世紀初期のイギリス・ロマン主義の時代は、知識としてのサイエンスが科学として専門職化する過渡期の時代であり、当時サイエンスとは、18 世紀の博物誌や文芸共和国の包括的知識を継承した知の体系を意味した時代である。例えば包括的な知識とは、当時の道徳哲学が「共感」という道徳を手がかりに、人間性という人間の内なる自然を探求し、解明しようとした際、その道徳哲学が射程とした知識は、哲学、医科学、文学、美学、政治経済学という多領域の言説が融合する知識を指していた。あるいは、当時自然科学の学問領域に属する医学も、身体や自然を解明するという観点から人間性を探求するための知識であり、近代科学としてはまだ完全に専門領域化されておらず、化学、実践医療、薬物学、薬草学、解剖学という様々な領域の知識を統合した内容であり、広範な知識の体系であった。このようにあらゆる学問領域が緩やかに横断する知の体系を構築していた 19 世紀初期の時代にあって、ロマン主義文学も、例えばジョン・キーツの詩のように、医科学的知識をメタファーとして援用しつつ、人間のあり方を描写することによって統一的、総合的な知識の体系に与した。こうしたイギリス・ロマン主義文学の包括的知識の有り様に着目することによって、文学的知識とは何かを問うことを研究の主眼とした。

また、イギリス・ロマン主義文学の最新の研究動向に着目しても、顕著となっている研究は、ロマン主義文学の身体的、物質主義的側面を明らかにする研究であり、例えば、2019 年 11 月にキャンベラ大学にて開催された第 5 回オーストラレーシア・ロマン派学会においても「身体的ロマン主義」というテーマが掲げられた。重要な点は、ロマン主義文学に表現される医科学的な身体性は、感受性、情動、劇場、建築、奴隷制、母性、動物といった広範囲にわたる知の体系とも密接に結び付くという研究の方向性が提示されていることである。したがって、ロマン主義文学における学際的な知識の体系を明らかにする本研究の課題は、国際的に最新の研究動向の一端を担っているといえる。このような研究の動向を踏まえ、イギリス・ロマン主義文学の知識のあり方を人文学的知と科学的知との融合という観点から考察した。

２．研究の目的

本研究の目的は、イギリス・ロマン主義文学が、知識を通じて大衆を啓蒙し、社会改革を企図するものであったことを明らかにすることである。具体的には、まず詩に表現される知識とは何かを明らかにする。19 世紀初期のイギリス・ロマン主義の時代における知識とは、医科学、美学、哲学、政治経済学といった学問領域において、知の分断ではなく、各領域の融合により構築された知識であったことを考察する。例えば、ロマン主義の時代において、ジェイムズ・ミル(1773-1836)の政治経済学における同胞意識を形成する共感(sympathy)は、アストリー・クーパー(1768-1841)の解剖学、生理学における、身体の各部位が呼応(sympathy)し、統一的身体を形成するという交感(sympathy)と通底し、それはジョン・キーツ(1795-1821)の詩における、想像力の基底に存在する、感覚的身体的な呼応(sympathy)とも共鳴する。あるいは当時、社会という構造体(constitution)は、憲法(constitution)を基盤に、人間の身体(constitution)と同様に、人間個人によって所有され形成される構造体であった。本研究の主眼は、こうした学問領域の壁を越えた統合的知識が詩において表現されたことと、その知識の根幹に存在した近代的な社会形成のヴィジョンを明らかにすることにある。さらに知識が国や階級や制度といった境界を超えて循環し、大衆の声という世論が形成され、社会改革を生むという革新的思想を有していたことを明らかにすることを最終的目的とする。

３．研究の方法

本研究においては、ロマン主義文学の非社会的な内向性と歴史的超越性という観点を大きく

転回させ、社会的歴史的な文脈に接続したうえで、イギリス・ロマン主義文学の社会性を社会改革という観点から問う。すなわち、ロマン主義の詩作とは、詩的言語によって表現される知識を社会に向けて提言し、大衆を啓蒙し、社会改革の道を開くという社会性にあったことに着目する。したがって、研究の焦点は、ロマン主義の詩人たちが、詩は時代の最先端の学問領域の一端を担い、社会改革の道を摸索するものと自負していた点を問うことにある。例えば、この時代の最先端の学問として医科学も発展を遂げ、新たなる知識と理論の興隆をみることになる。しかし、当時の医科学は、病理学という実践的な知識の開拓のみならず、脳と神経を中心とした身体像の解明に至り、ニュートン的機械の身体像を刷新する新しい人間性のヴィジョンを呈示した。すなわち、当時の医科学は、文学と同様に、人間とは何かを探求する学問にほかならず、革新的、近代的な人間像を知識として追求した。詩は、こうした医科学と手を携え、大衆化する時代の多くの人々に対して、詩的言語を通して近代的な人間像を表現し、そうした人間による新しい共同体の在り方を示唆したといえる。

したがって、ロマン主義文学による社会改革の礎は、詩に表現される知識によって広く人々を啓蒙するという、知への信奉と共同体意識にある。詩において表現される知識とは、ウィリアム・ワーズワスが述べたように、詩に表現される「情熱と知識」によって、「国や風土」、「言葉や作法」、「法や慣習」の違いに見られる多様性を超越して、「人間社会の広大な世界」を一体化するものである。 (William Wordsworth, “Preface,” *Lyrical Ballads*, 1802)。このように、イギリス・ロマン主義の詩が、社会的共同体の在り方や人間性を、医科学をはじめるとする学際的な知識によって表現することを研究の主眼とし、学際的な知識の根幹を明らかにすることを研究の柱となす。

４．研究成果

本研究における成果とは、イギリス・ロマン主義文学を学際的な知の重層空間において問い直すことであり、そうした知識によって表現された近代的、革新的な人間性のイメージが、現代における知識の在り方について重要な示唆を与えると考える。さらに、イギリス・ロマン主義の詩が、社会的共同体の在り方を、科学をはじめるとする学際的な知識によって表現したことを明らかにすることは、現代社会において看過されてきた、文学的言語が社会に寄与する知識を保持しているという、文学の持つ社会的役割を再発見することに通じる。科学偏重の時代において、人間が共同体として社会をどのように形成するかという、人間性についての問いを哲学する文学の役割を再考し、真の知識とは何かを問うことが本研究の成果となる。

具体的には、19 世紀初頭のロマン派の時代は学問領域が専門分化する過渡期の時代であったことを前提に、専門化する知の体系に詩がいかに寄与しうるか、人間や社会に有用であるとみなされた科学に対して詩の意義とは何かをいかに詩人達が表明したかを明らかにした。16 世紀のフィリップ・シドニー、17 世紀のジョン・ダンを経て、19 世紀のウィリアム・ワーズワス、パーシュ・ビッシュ・シェリー、ジョン・キーツらの詩において結実する詩の包含する知識とは、科学と詩が融合する諸学問の包括的な知の体系であり、現代の社会における人文学と自然科学の結びつきの再構築を目指すための指針となり得る知の体系であることを明らかにした。その際、18 世紀のアダム・スミスの政治経済学に見る、共同体を形成するための共感(sympathy)が、19 世紀のアストリー・クーパーの医科学的知見に見る、身体の各部位の呼応(sympathy)と、統一的身体を形成する交感(sympathy)と通底し、それはジョン・キーツの詩における、想像力そのものを表現する、感覚的身体的な呼応(sympathy)と共鳴するという、知の横断の有り様を明らかにした。

また、ロマン派の美学的改革を、美学理念の変容という観点から、18 世紀の新古典主義から 19 世紀初頭のロマン主義を経て、19 世紀中葉のラファエル前派までにいたる長い歴史のスパンにおいて考察し、美学的改革が詩と絵画という学際的な結び付きや知識によってなされたことを明らかにした。さらに、美学的改革が共同体という社会的ネットワークの中から見出されることを考察し、時代背景と結び付いた社会改革の精神性を浮き彫りにした。例えば、美学理念については、特に言語と視覚表象、詩と絵画の密接な関係を中心に、「姉妹芸術」の伝統がどのような歴史的変容をなしたかという観点から研究を進めた。ロマン主義文学においては、言語と視覚表象との関係を取り結ぶ伝統といえば、18 世紀の新古典主義の作詩法が基底にあり、新古典主義の詩は、ルネッサンスからの伝統である姉妹というアレゴリーに倣い、コード化された詩語と視覚的イメージを用い、18 世紀の「端正」(decorum) の美学に奉仕した。これに対して、詩的言語と視覚表象との新しい関係を「実験」として呈示したのが、ウィリアム・ワーズワスと S. T. コールリッジの『抒情歌謡集』であった。さらに第 2 世代におけるリィ・ハントやジョン・キーツらは、伝統的な美学的規範を逸脱するスタイルの多様性や商業主義への批判といった社会的美学的批判を詩において表現するという言語改革を標榜した。こうした詩の革新性は、ヴィクトリア朝のラファエル前派の絵画に継承され、ジョン・エヴァレット・ミレイや W. H. ハントらは、18 世紀から 19 世紀までの王立美術院を中心とした伝統的規範を排する新しい絵画のスタイルと視覚的イメージを表現した。このように、詩と絵画という学際的な結び付きを経て、言葉とその視覚的イメージとの慣習と化した結び付きに大きく修正を強いる、新しい見方を呈示するということに、ロマン主義の美学的革新性が存在したことを明らかにした。そして、その革新性の基軸には、社会批判の精神が宿っていたことに着目することによって、詩的改革における湖畔派

やコックニー詩派、ラファエル前派といった共同体の社会的役割や社会改革の精神について考察を行った。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計8件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　6件）

１．著者名 後藤　美映	４．巻 48
２．論文標題 『デカメロン』をいかに歌い、いかに描くか ―「イザベラ」をめぐるキーツとミレイの革新性	５．発行年 2024年
３．雑誌名 イギリス・ロマン派研究	６．最初と最後の頁 19-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 後藤　美映	４．巻 無し
２．論文標題 愛を語るというタブー　― Danteとロマン主義の詩における言葉を語ることの意義	５．発行年 2024年
３．雑誌名 日本英文学会九州支部第76回大会シンポジウム　プロシーディングス	６．最初と最後の頁 17－18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 後藤　美映	４．巻 26
２．論文標題 マルタ島とバイロンの地中海ー『チャイルド・ハロルドの巡礼』第1巻、第2巻におけるヨーロッパの過去と現在（口頭発表要旨）	５．発行年 2022年
３．雑誌名 日本バイロン協会会報	６．最初と最後の頁 1-6
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 後藤　美映	４．巻 72
２．論文標題 マルタ島とバイロンの地中海ー『チャイルド・ハロルドの巡礼』第1巻、第2巻におけるヨーロッパの過去と現在	５．発行年 2023年
３．雑誌名 福岡教育大学紀要	６．最初と最後の頁 27－36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 後藤　美映	4．巻 Web 上での公開
2．論文標題 ロマン主義の詩が導く知と社会とはーJohn Keats と医科学	5．発行年 2022年
3．雑誌名 日本英文学会第94回大会（2022年度）Proceedings	6．最初と最後の頁 Web上での公開
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 後藤　美映	4．巻 47
2．論文標題 ロマン主義の詩が導く知と社会とはーJohn Keats と医科学	5．発行年 2023年
3．雑誌名 イギリス・ロマン派研究	6．最初と最後の頁 53-69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 後藤　美映	4．巻 47
2．論文標題 西山　清著 『キーツ：断片の美学』書評	5．発行年 2023年
3．雑誌名 イギリス・ロマン派研究	6．最初と最後の頁 137-142
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 後藤　美映	4．巻 46
2．論文標題 『デカメロン』をいかに歌い、いかに描くか（シンポージアム要旨）	5．発行年 2022年
3．雑誌名 イギリス・ロマン派研究	6．最初と最後の頁 39-41，50-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　4件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 後藤　美映
２．発表標題 愛を語るというタブー　― Danteとロマン主義の詩における言葉を語ることの意義
３．学会等名 日本英文学会九州支部第76回大会シンポジウム「西洋文学における愛とタブー　―イギリス・ロマン派とポストモダンを中心に」（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 後藤　美映
２．発表標題 ロマン主義の詩が導く知と社会とはーJohn Keatsと医科学
３．学会等名 日本英文学会第 94 回大会シンポジアム「サイエンスと詩の弁明-ロマン主義文学にみる知の横断」（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 後藤　美映
２．発表標題 マルタ島とバイロンの地中海ー『チャイルド・ハロルドの巡礼』第1巻、第2巻におけるヨーロッパの過去と現在
３．学会等名 2022年度日本バイロン協会談話会（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 後藤　美映
２．発表標題 ロマン主義の詩が導く知と社会とはーJohn Keats と医科学
３．学会等名 イギリス・ロマン派学会　シンポージアム「詩的言語と視覚表象ー18世紀末から19世紀への展開を読み解く」（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 後藤　美映
２．発表標題 Ted Hughes の詩と創造性
３．学会等名 英詩の会
４．発表年 2021年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関